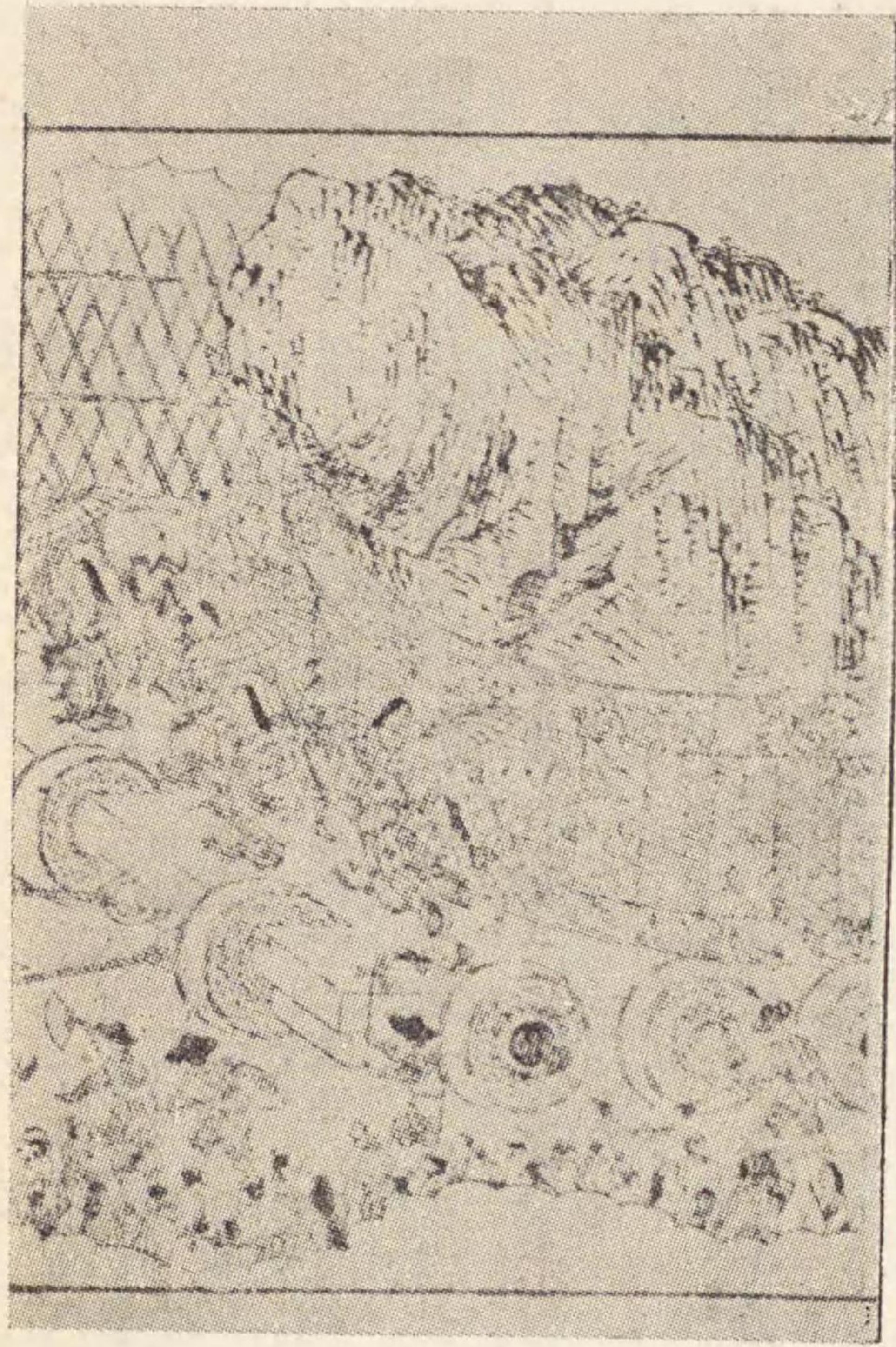


せう。

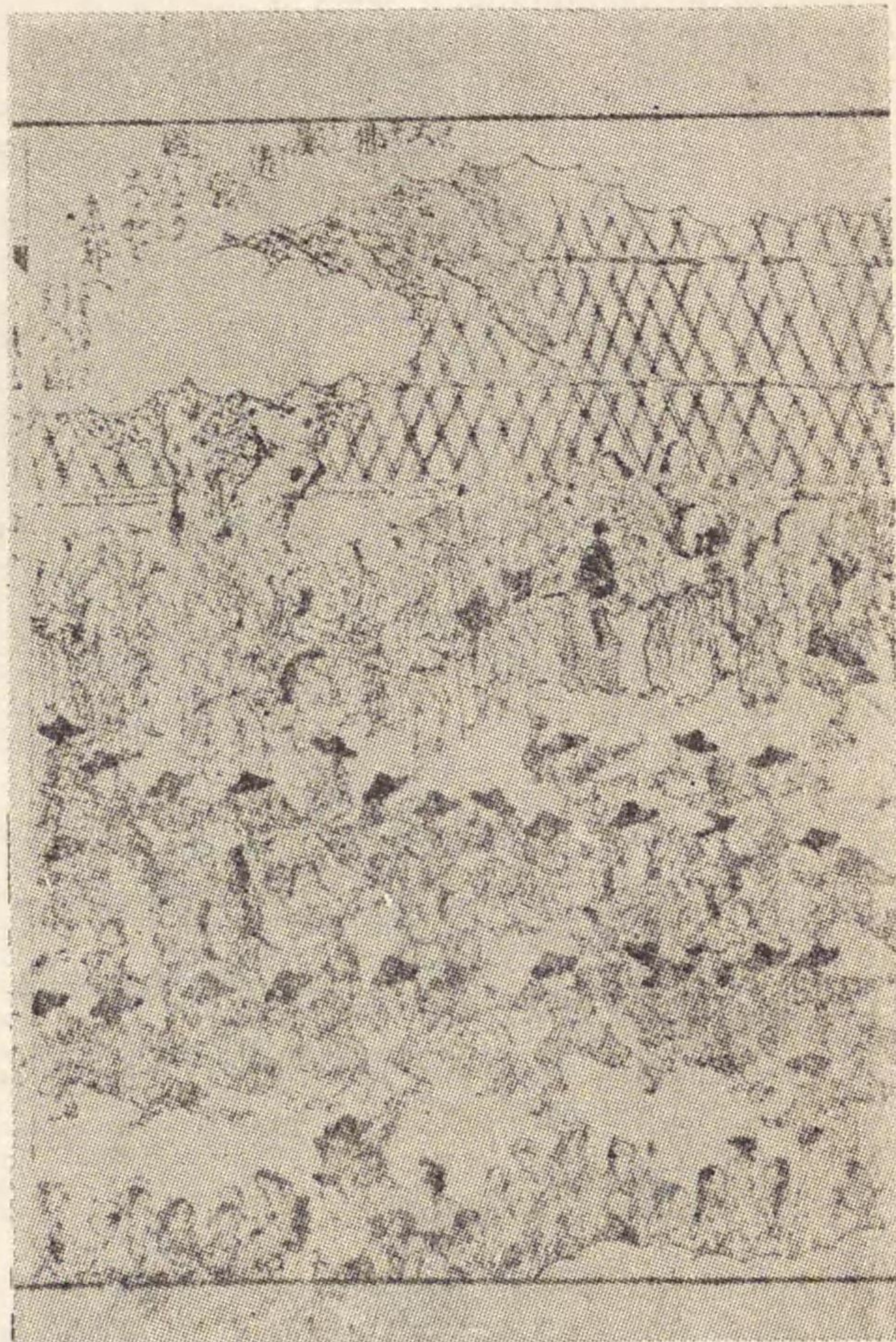
大佛は五年を費して出来上りました。寺の名を方廣寺と云ひます。ところがこの大佛は慶長元年の大地震に破壊したので、再建するつもりでしたが朝鮮征伐などで忙しく、遂にその暇がなくて秀吉は死にました。後に秀頼がこれを再建したので



殿造營 石を運搬してゐるところです。罫りが十ます。

すが、その時に鑄た鐘のところが家康と争ひを生じ、遂に豊臣氏滅亡の原因となつたことは、さすがの秀吉も夢にも想像

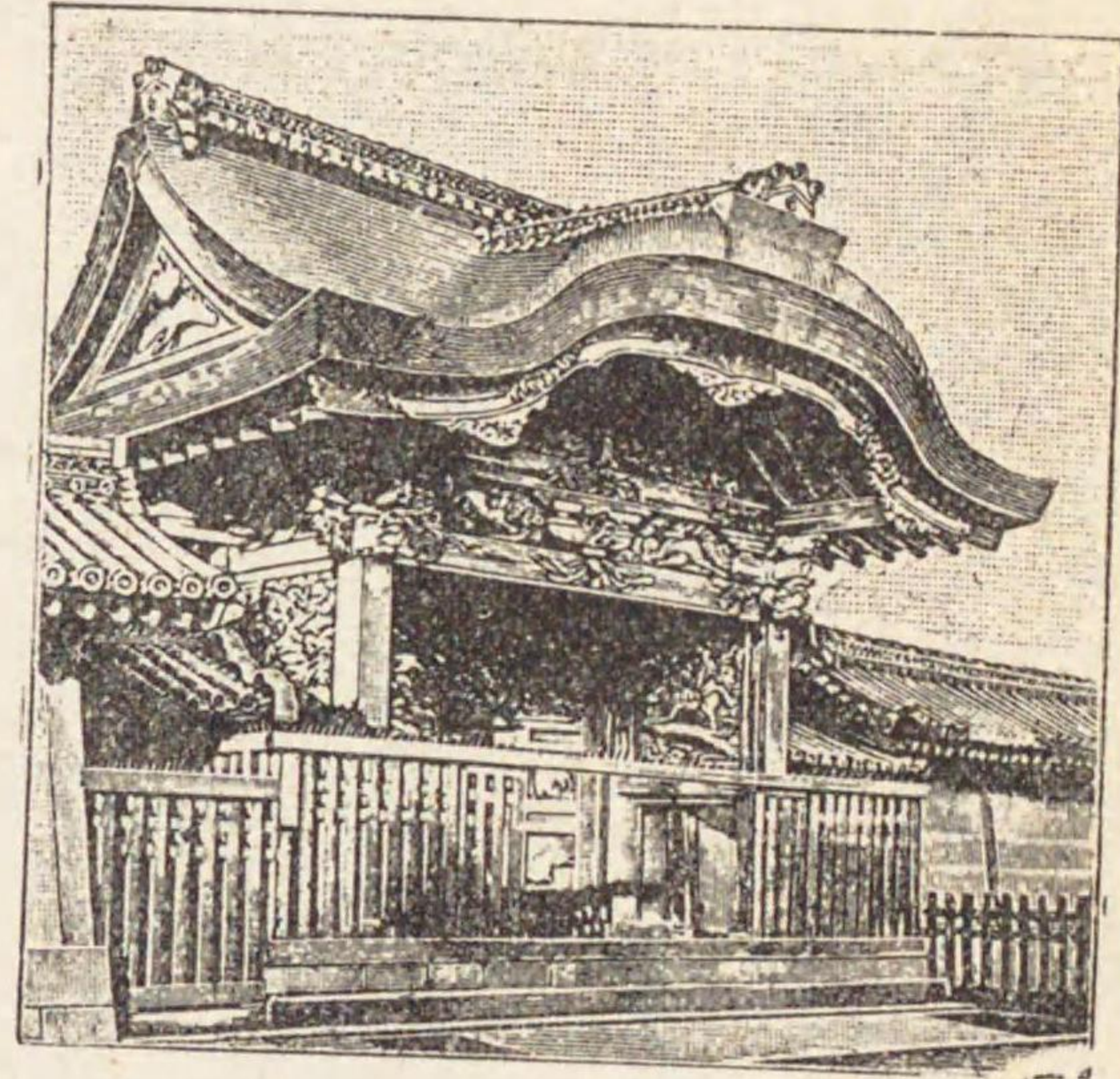
を築きました。桃山といふのは今明治天皇御陵のある附近の小山で、平野を見下した要害の地點です。秀吉は自分でそのあたりを歩き廻つて、「こゝをこゝ切り開いて、こゝにこゝいふ建物をたて」と一々工夫を凝らして指圖をしました。そこで秀吉の豪邁な氣分が、その建築や彫刻の上にはあらはれて、金城湯地の固



京都大佛 秀吉の命によつて、蒲生氏郷が近江から巨六米もある巨石で、數百人が綱で曳いてゐ

しなかつたこととせう。これ等のことに ついては更に 次の巻で詳しく述べる事に致しませう。

秀吉は又伏見の桃山に城



西本願寺唐門

京都西本願寺の唐門は、もと伏見城にあつたものを移したものであります。四脚門で、一面に孔雀、牡丹に獅子、松に鶴などの雄渾な彫刻が施してあります。

て一部分が残つてゐるわけですが、これによつても昔の伏見城を想像することが出来ます。全體の詳しいことは今はわかり兼ねますが、瓦の端に黄金を塗り、百間の廊下には黄金の燈籠を釣り、又長押や鴨居は黒い漆で塗つて金の蒔繪を施し、襖にも金を張つたといふことです。ほんとにそれは目の覚めるやうな立派なものであつたことでせう。

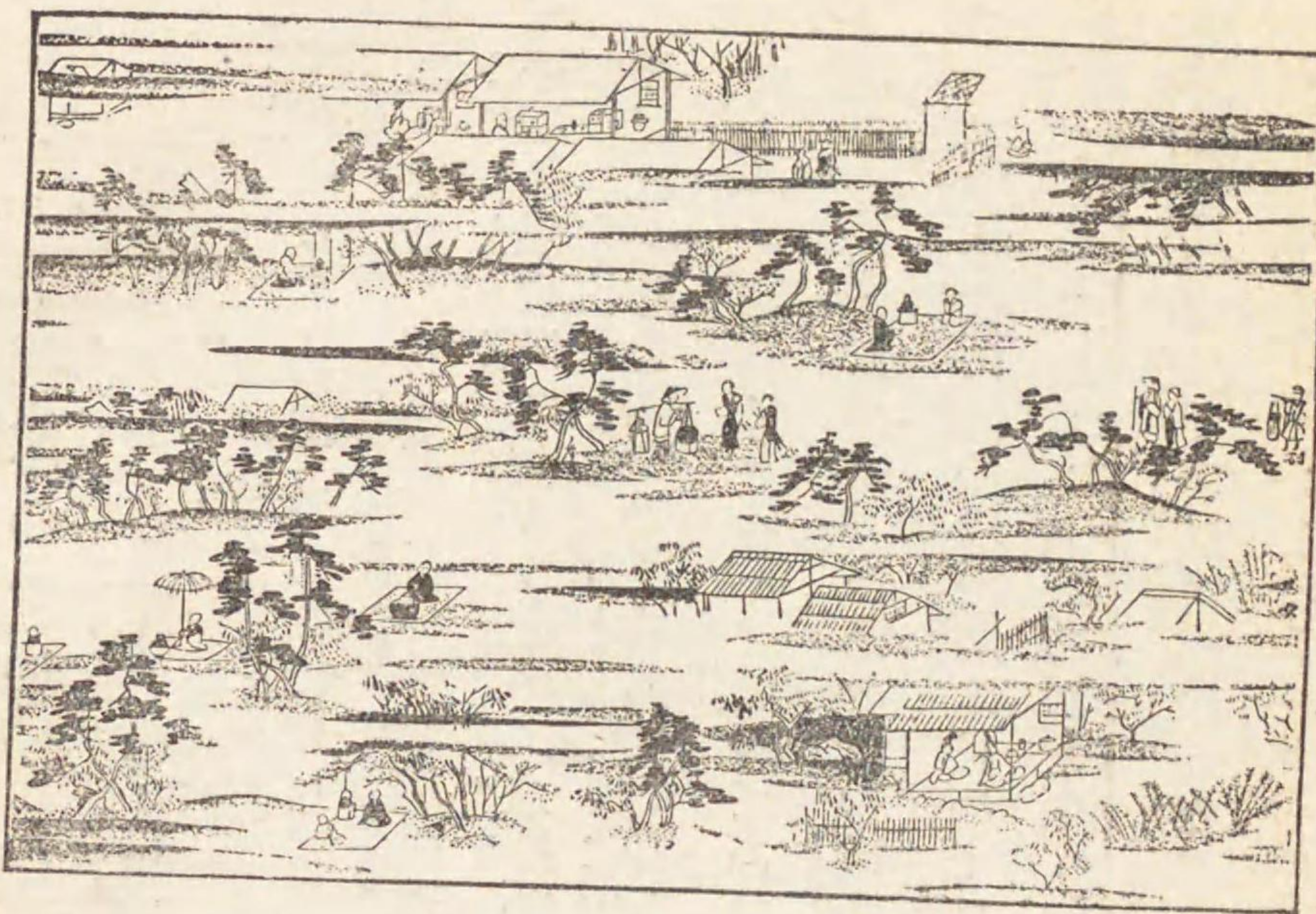
め、瓊殿玉樓の觀、それは容易に説明も出来ぬ程の偉大さ、美麗さでした。この城は豊臣氏の滅亡後に、徳川氏の手ですつかり取りこはされて、方々へ移し建てられましたので、今では西本願寺の唐門となつ

千利休の才智

掃除した庭に木の葉を落とす

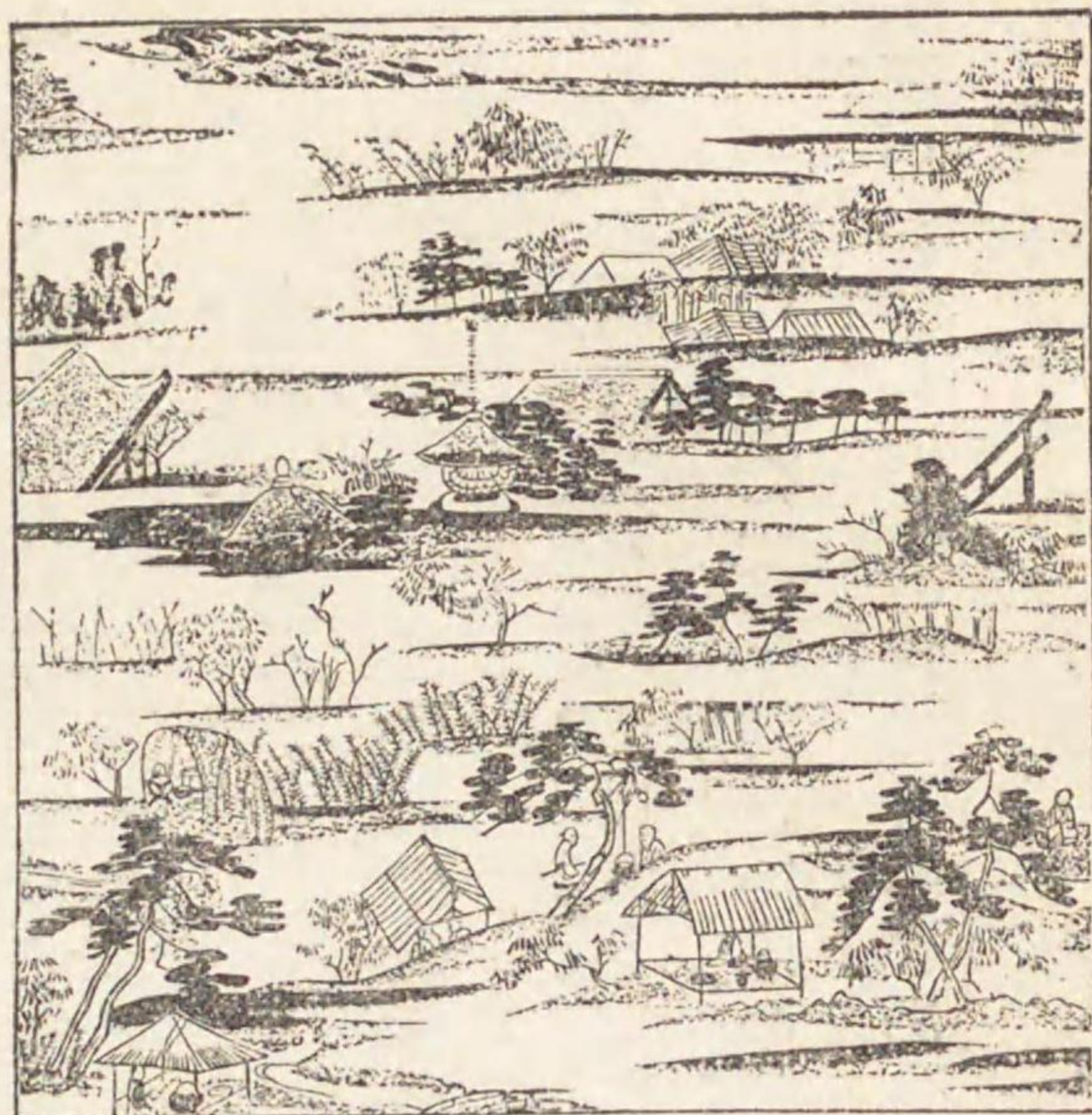
秀吉はこんな立派な建築をしましたが、それは贅澤をしいといふ意味からではありませんでした。長い間の戦争續きで人民の心が荒んでゐるから、これを和げて平和の風に向はせようといふ意味が多分に含まれてゐたのです。ほんとに戦争にかけては全勝を誇つた秀吉も實は平和を愛する人でした。早く世の中が治まつて天下が太平になることのみを希つてゐました。そこで茶の湯を奨励しました。

茶の湯といふのは、お茶を飲む遊戯です。茶はもとく印度や支那にあつたもので、平安時代に僧の最澄がはじめて日本に持つて歸りましたが、世間一般の人が茶を呑むやうになつたのは鎌倉時代から後のことで、茶の湯の儀式が出来上つたのは足利義政の時代です。併しほんとにそれが完成したのは、秀吉の時代に出た千利休によるものだといふことです。



の茶會  
け、風流に志のある人々を廣くつにつて茶の湯を催し、士  
一代の豪華版の一つであります。

利休は、本名を宗易と云ひまし  
た。子供の時から茶をたてること  
が好きで、又非常に才があつて氣  
がきいてゐました。或日茶の師匠  
が利休の才を試みようと思つて、  
庭を掃除せよと命じました。利休  
がお庭へ行つて見ますと、もうす  
つかり掃除が綺麗に出来てゐて、  
箒の目も正しく塵一本も落ちてゐ  
ません。そこで、暫く佇んで見て  
ゐた利休は、木の枝を少しゆすつ  
て、木の葉を三つ四つ落して、そ  
のまゝ歸つて、師匠に報告しまし



北野  
北野の松原に八百餘の茶席を設  
民と樂を共にしたといふ、秀吉

た。師匠が行つて見ると、綺麗に  
掃除した庭に木の葉が少し散らば  
つて、却つて風雄な趣がありま  
したので、利休の才にすつかり感  
心して、それから茶道に關する凡  
ての秘訣をすつかり授けたといふ  
ことです。

幸を仰いだ時、數人の御給仕人が選  
び出されましたが、利休はその中  
の第一番でした。行幸の儀の終つた  
後に、秀吉は利休に官を授けるやう  
に奏請しましたが、利休は固くお辭  
りして遂に受けませんでした。藝道  
に達して居れば官も爵もいらな  
いといふ考をもつてゐたのです。

天正十五年十月に、秀吉は京都の北野松原で大茶會を催しました。貴賤貧富の別

なく、誰でも來會して茶席を設けることを許しましたので、三百六十餘人の來會者がありました。秀吉は自分で茶席を設け、茶をたて、公卿や諸將にすゝめ、自分も亦他の茶席を廻つて茶を呑みました。又持つてゐる茶器を澤山並べて一般の展覽に供し、利休も亦その所藏品を陣列しました。こんなことがあつてから、茶道はますます盛に世に行はれるやうになりました。今頃茶道の流儀に千家といふのが最も盛なのは、千利休から起つたものであります。

無禮極まる利休

傲慢の報いは靦面

その頃の諸侯は皆茶の湯に熱心でした。そしてお茶の道具の珍らしいものを買ひ集め、一つの茶碗に何千圓といふお金をも惜まらずに出しました。そしてそれ等の道具が舊いか新しいか、眞のものであるか偽物であるかといふことは、多くは利休に頼んで鑑定させてゐました。それですから利休は、毎日の様に諸侯の門に出入し、

どんなえらい大將の處へでも平氣で行つて、極めて親密な交りをつぶやうになりました。

そこで利休は大そう意張るやうになつて、人を人とも思はぬ傲慢な性質が、だんだんひどくなつて來ました。この利休にお吟といふ娘があつて、他へ嫁入りました。夫が死んだので一人で暮してゐました。秀吉が嘗て東山へ花見に行つた時にこれをみて、「あれは何處の女か」と近臣にしらべさせますと、それが利休の娘だとわかりました。秀吉はすぐに利休の處へ使をやつて、あの女を小間使にしたいからと申入れましたが、利休は何と云つてもこれを承諾しませんでした。

大徳寺の古溪といふ坊さんは利休と仲よしのお友達でした。そこで古溪が大徳寺の山門を建てますと、利休は自分で自分の像を刻んで、これをその門の上に飾りました。さア大變な評判です。「大徳寺の山門に利休が自分で刻んだ像を置いてゐるぞうだ行つて見ろ、見なけりや話にならん」といふので、門の前は黒山のやうな人だかりとなりました。

そのことを聞いた秀吉は大變に怒りました。「山門と云へば如何なる公卿でも通るのは勿論、畏れ多くも天皇陛下でもお通り遊ばすことがあるかも知れない、それに利休は一體何ものだ、たかが茶の湯の師匠に過ぎぬ、身分のいやしいものではないか、それが自分の像を門の上にあけて、尊い方々を見下すといふ法があるか。無禮極まる奴だ、誅せなければならぬ」と。そこで中村一氏を利休の家に遣はして自殺を命じました。

併し利休はさすがに茶の道に達した人だけあつて、命を聞いても少しも騒がず、顔色少しもかへないで「しばらく待つて下さい」と云つて、別室に入つて門人に命じて花瓶に花を生けさせ、茶を入れさせてこれを飲み、家財を悉く近親のものに分ち與へ、それから使の前に出て腹を切つて死にました。

あまり傲慢で人を人と思はないため、遂にこんなことになつてしまつたのは、吾々にとつてもよい戒めであります。

永徳と山樂

病氣でも治す繪の力

その頃の繪かきで有名であつたのは、狩野永徳と山樂とでありました。永徳は有名な狩野元信の孫で、祖父の教へを受けて繪が非常に上手になり、山水でも人物でも、動物でも花でも何でもよくかきました。その筆力は非常に強くしつかりしてゐて、如何にも壯麗雄大な男性的の繪でした。秀吉が聚樂第を建てた時に、その金壁に西湖の圖を描きましたが、建築の雄大壯麗とよく調和してほんとに立派なものでした。當時大きな立派な建築をすると云ふものは、皆永徳に繪を頼んだといふことで、大きな畫に於ては古今にこれに匹敵する畫家は無いと云はれてゐます。山樂は木村永光の子で、平三といふ名でした。永光は秀吉の近侍でありましたから、いつも秀吉のそばに居ます。それで平三も亦父に従つて秀吉のお伴をすることがありました。秀吉が城を築く時など、毎日のやうに工事場に行つて、監督します



狩野永徳の繪

これは金屏風に描いたもので、とても目の覚めるほど美しいものですが、寫眞では残念ながらそれがよくわかりません。



狩野山樂の繪

筆づかひのいかにも雄大で華麗なところがこの時代の繪の特徴であります。

ので、平三も父と共にそのそばに居て、時には秀吉の杖を預つて、持つてゐたりしました。

或日のこと、平三は秀吉の杖を預つて、それで砂の上に馬の繪をかきました。それがあまり立派に出来ましたので、大勢の人たちが周圍に立つて見ながら「何といふ立派な繪だらう」と云つて賞めたゝへてゐました。これを見た秀吉も亦非常に感心して「この子は繪かきにするがよい。立派な師匠につけたら嘸上達するだらう」と云つて、狩野永徳の處にやつて繪を學ばせることゝし、やがて永徳の養子にするやうに命じましたので、こゝに平三は狩野山樂と名乗るやうになりました。

こうして山樂は悉く永徳の傳を受けて、人物でも花鳥でも岩や樹でも、何でも永徳によく似た繪を描くやうになりました。殊に龍と虎と鷹と馬とは、師匠の永徳よりももつと上手に描いたと云はれてゐます。東福寺の法堂の天井に畫いた龍の繪などは、その最も傑作とする所で、その外近畿地方のお寺には山樂の繪をもつてゐるものが澤山あります。

山樂は又古い土佐派の繪を學び、後には支那の宋元の畫風を慕つて、筆力がますます精巧となりました。よく鐘馗の繪をかきました。これを床の間にかけておく、病人が全快するといふので、方々から頼んで來るものが引きもきらないといふ有様でした。繪の力で病氣がなほるとは何と感心な話ではありませんか。

彫刻と焼物

三代つゞく左利

彫刻師では左甚五郎といふのが有名でありました。京都の今出川のあたりに住んでゐたといふことで、桃山城や聚樂第の長押や欄間に彫刻を施しました。その外近畿地方の神社やお寺は勿論、關東地方などにもこの人の彫刻だと傳へられてゐるものが澤山ありますが、何處までが本統だかよくわかりません。左甚五郎といふ名前は、その人が左利だったからだとも云はれてゐますが、そうではないといふ人もあります。甚五郎の子が左宗心・宗心の子が左勝正だといふことになつてゐますが、

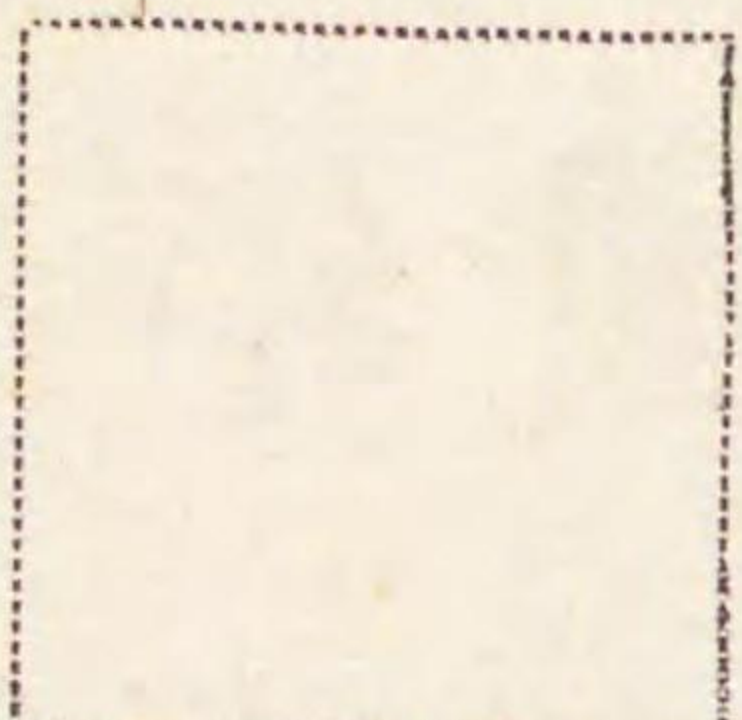
親子三代も續いて左利ばかりであつたといふのは少しをかしいやうです。或は飛驒の匠と云つて昔から有名な大工の系統がありますから、飛驒の甚五郎とでも云つてゐたのを、左甚五郎と訛つたのかも知れません。なにしろ彫刻の非常にうまい人であつたので、何でも立派な出来ばえのものは「あれも甚五郎だ、これも甚五郎だ」と、他の人の作までが甚五郎の名で傳はり、色々な昔話までがごつちやになつて、様々の傳説なども出来たものだらうと思はれます。

次にこの時代の美術工藝の中で、忘れてならないものは陶器であります。それは一つには秀吉の朝鮮征伐によつて朝鮮との交通が開け、あちらから多くの工人などが來たことにもより、又一つには秀吉が茶の湯を盛にしてから、千利休その他の茶人が様々の茶器を作らせては玩んだといふこともあつて、陶器の製法が色々工夫研究せられたのであります。その頃の陶器の中で最も名高いのは樂焼・唐津焼・備前焼等であります。

一體焼物は多く支那や朝鮮から渡つて來たもので、日本で出来る品と云へばろく

なものはありませんでした。それで朝鮮征伐の時にあちらへ行つた人たちは、田舎の百姓の日常の飯食ひ茶碗までが、立派な高麗焼であるのにびつくりしたといふことです。之は明治の始め頃に西洋へ行つた或人が「獨逸では乞食までが洋服を着てゐるし、子供までがドイツ語を話してゐる」と云つて驚いたのと同様、ちつとも不思議なことではない筈なのですが、なにしろ當時の人は驚いたので、これから多くの陶工が伴はれて日本へ来て、各地で新しい焼き方をはじめたものであります。肥後の高取焼、豊前の上野焼、肥前の有田焼、平戸焼、薩摩の薩摩焼、長門の萩焼など、皆その頃朝鮮から渡つて来た人によつて始まつたもので、その焼き方などの研究に至つては、色々の苦心談などが傳はつてゐますが、あまり長くなりませんからこの話はこれで終りといいたします。

昭和十一年三月三十日印刷  
昭和十一年四月三日發行



11.3.31

少年國史文庫 7

織田豊臣時代 [定價一圓]

著者 西 龜 正 夫

發行者 岡 本 正 一

印刷者 櫻 井 專 吉

印刷所 厚生閣印刷部

發兌 圖書 厚 生 閣

振替東京五九六〇〇番  
電話九段三二一八番



# ★ 少年愛國讀本 ★

東京成蹊  
學園訓導

野瀨寬顯先生著

趣旨

▽日本精神を年少第二の國民に正確に把握せしめんが爲に！  
▽愛國心涵養の方法が在來餘りに抽象的であつたのを補はんが爲に！  
▽修身國史地理國語の各科を國民的自覺の下に統一補説せんが爲に！  
▽將來日本を背負つて立つ意氣と覺悟を養はしめんが爲に！

（全五冊）  
兒童に喜ばれる新しい小國民文化讀本

吾等の愛する國日本！日本の船が今どんなに歐米先進國の商品を壓倒し南米からアフリカ印度其他凡ゆる地球上の港々に日章旗をへんぼんと翻しつゝ世界各國から狼の如く恐れられてゐるか、諸君はそれを知つてゐるであらうか、武の國日本は今や堂々商業の國工業の國として世界中に君臨してゐるのだ。然し吾等はそれを威張る前に、どうして日本がこんなに強いのか、又どんな人達が今迄日本の爲に盡して来たか、世界の大勢はどうなつてゐるのか、それらに就て正しい知識を持ち、且つ確たる自覺を持たねばならぬ。日本を愛する諸君！此意味で續いて下記の本を讀んで下さい。

## ◆祖國の話

われ等の祖國日本だ  
日本を知らなければ  
日本人でない。何よりも先づ祖國を知れ

## ◆風習の話

風習は氣風の源泉である。日本の眞の國民性を自覺させる現在までの風習の話。

## ◆戦争の話

一度も負けた事のない日本。それは何故であらう。各戦争の原因から武器迄詳細

## ◆偉人の話

偉くなる爲には偉い人の傳記を讀むのが一番だ。面白い中に愛國心を涵養させる

## ◆國史の話

世界一の日本は五十年や百年で築かれたものではない。類なき日本の國史を見よ

各冊共美觀口繪挿多  
四六判細布・美裝  
各函入二百十餘頁  
定價各一圓二十錢  
送料各冊十四錢

著 西 龜 正 夫 先 生

# 少年國史文庫

☆ 全二十冊 全卷由成賣

1 神代と上古	7 織田豊臣時代
2 奈良及び平安時代	8 江戸時代(上)
3 源氏と平氏	9 江戸時代(下)
4 鎌倉時代	10 明治維新前後
5 吉野朝時代	11 明治時代
6 足利及び戦國時代	12 大正昭和時代

國史はわれわれの祖先のことを書いたもので、これを知らないものは立派な日本人とは言はれませぬ。ですから國史は一番大切な科目です。三千年のわが國史には随分色々なことがありました。そしてその底を流れてゐるものは大和魂です。昔から立派な人になつた傑い人は、みな國史を讀んで發奮した人たちです。本文庫は始めから終りまで、面白く且つ間違ひのないやうに書かれた子供のための一番詳しい國史の本です。

四六判美裝函入各冊二百頁  
定價各一圓  
送料各冊十四錢

元乃木第三軍副官  
服部真彦中將跋  
姪孫 菊池又祐著

〔好評五版〕

四六判布裝函入 價一圓八十錢  
三百五十頁 送料十四錢

# 乃木夫妻の生活の中から

人間的な然も  
其故に苦み悶  
へた武人夫妻  
の眞面目躍如

近く餘りにも身近く  
將軍夫妻の寵愛を受  
けた肉親の秘稿!!

〔内容抄〕——新阪邸のこと・勝典の望遠鏡・街上のナンセンス・三瓶の香水・保典の出征・少年の世界に・勝典の死・十郎の死・保典の死・凱旋の日・私のきいた昔語り・寮生と菊池子弟に對して・病床閉日・生活の片鱗・渡英と露國訪問・私の欲しがった燈籠・等滿載

旅順の激戰中に、愛兒を思ふて密かに一行者の門を叩く靜子夫人！  
凱旋の祝宴の夜に、シロウマ(濁酒)に酔つて寺内陸相を著者に撲ら  
せた人間乃木！ 萬歳萬歳の提灯行列の歡呼を耳に、勝典保典二子  
の遺骨を前にして「息子に頭を下げるわけがあるか、靜！ 靜！ 酒  
を持つて來い」と軍服を脱ぎ棄て、大の字に寝る悶々の將軍の姿！  
何れも未だ嘗て世に現はれざる將軍夫妻の、肉親の見た生活記録だ

川畑篤郎著 〔三版〕

四六判極美裝本 普及版定價一圓四十錢  
三六〇頁振假名付 送料十四錢

# 小學 日本女性名花集

嵐の輿望に答へて  
茲に普及版刊行!!

國史の上に輝く偉い女性ばかり  
をり集めた面白い読み物。  
読んで楽しく、知らず識らず  
のうちに修養が出来る。歴史  
の力がつく。読み物として最  
上だ。總振假名付本。學校に  
備へてよく、家庭で讀ませて  
成績があがる。女の偉い人々  
の傳記を全部をさむ。

## ★ 略概次目 ★

御國開き・天照大神・奇稻媛と八上媛・須勢理媛・天  
細女命・木花咲耶媛・草香の幡・大葉子・弟橘媛・神  
功皇后・光明皇后・小野小町・和泉式部・小式部内侍  
推古天皇・紀伊勢大輔・常盤御前・紫式部・義朝の娘  
赤染衛門・伊弉諾大神・清少納言・源朝臣・丹  
政治家・御前・小督・藤原氏・藤原氏・藤原氏・藤原氏  
後局・辨内侍・瓜生・小谷の母・勝頼の妻・光秀の  
正夫人・慶光院の人々・小保の母・勝頼の妻・光秀の  
妻・忠興の妻・一豊の妻・澁君(他近代まで數十名)

今まで皆さんの讀み物の中には、面白いものが澤山ありま  
した。しかし惜しいことに、日本歴史の中で名高い女の人たち  
ばかりを集めた讀み物は、一つも見當りませぬ。英雄傳や豪傑  
傳や武人傳はあつても、女性だけの面白い傳記はないのです。  
どんでん賣れるので普及版を出しました。面白くて、ずっと續  
けて讀めば女性日本歴史にもなります。歴史を知らない國民  
は母のいない子と同じです。あなたの方の母の姿を知つて下さい。

姉崎正風氏編

# 人生逸話

四六判純美麗裝  
函入二九〇頁  
定價一圓五十錢

送料十四錢

懦夫を起たしめ失意の人を發憤せしめるもの、これ傳記の外になし傳記の粹を抜きこれに訓話の體を與ふるもの、之即ち人生逸話なり逸話は偉人の内面生活の顯現であり、これを體驗することは精神修養の直接刺戟となる。日々座右に一本を置けば讀者自ら向上せん。

【内容の一部】——妻と老人に勵まざる・橋下の乞食に情の竹皮包を與ふ・遲鈍の才を以て杉山流を開く・誠忠を以て宮内大臣を低頭せしむ・大晦日に商人の心掛けを説く・好んで盲目學者の妻となる・天覽演技で體重が減る・正月に假病して寝込む・射撃の拙手に賞を與ふ・敵軍に多くの酒肴を贈る・寢衣の儘で参内す・流謫の鳥から卒都婆を流す・自若として論語を講ず・勝負を度外視して事に當れ・記念の痣を大切にす・女の一言を聞いて悟る・其の他數十皇國の興廢は人物の有無に依つてきまると人物を作るものはやはり人物であり、逸話の價值もここに在る。本書の價值はその「人生逸話」なるところにあり。各話並び立つて一讀巻を措く能はざらしむ

小瀧 淳著

四六判美麗函入  
四百七十餘頁  
定價二圓  
送料十四錢

# 先賢逸話美談

逸話の「粹」を集め美談の「精」を蒐む總振假名付の美本子の爲の好讀物大人の爲の修養書讀んで面白く平易教科指導の良資料學校に家文庫に!!

「日本人はこゝにゐる！」さう叫んで決然起つた村上氏の満洲に於ける日本精神の發揚は今日我々に大きな感動を與へる。が、古來かくの如き崇高なる精神の發露は枚擧に遑がない。著者は名話・佳話・美談をよく廣きに互つて涉獵し、世に未だ出でざるもの幾十を加へて簡潔深遠、粹を抜き精を集めて三百の村上氏を過去に求めた。これ實に美談の原泉、實話の寶庫自己修養に教材に誠を得難き好指針だ。A—本書を讀めば自ら發奮心努力心が起る(修養書) B—學校で家庭で引張り風! (面白い平易な讀み物) C—教材に用ひて直ちに活かせる(便利な参考書) D—子供に讀ませて安心出来る(總振假名付科外書)

## 全一冊—内容抄—

尙武篇 弓の上手・手負の猪・度膽を抜く・奥州の押・兵は密なれ・兵糧は大切 忠孝篇 忠孝二道・巳の刻・田舎武士・加封を固辭・阿諛を惡む・腕白の忠義等 克己篇 見て見ぬ振・田世の緒・書世は貧乏・咳拂ひ・我身を知れ・過を責めず・等 教化篇 人物の養成・遊女通ひ・毀譽相半・智仁勇・米倉の番人・小智と大智・等 信義篇 誓言の裏切・弟子思ひ・同姓不娶・金には立てぬ針・よい家來・若輩者等 禮節篇 行持潔白・老臣を勉る・能裝束・令は犯せず・左右の手・儒者氣質・等 政治篇 重箱の味噌・進言を容る・市中の物價・善行表彰・異材を抜く・上下和睦・等 節儉篇 節約勵行・奢侈を惡む・小豆は穀・木綿綿・不時の用意・質素勤儉・等



侍講 元田永孚 先生撰・蘆谷重常 先生謹譯  
**口語 幼學 綱要**

原本挿畫四十八頁入  
 總ルビ附總布裝函入  
 四六判五百數十頁  
 定價 二圓  
 送料 十四錢

明治天皇の聖慮に  
 基く勅撰訓話集！  
 小學兒童にも讀め  
 る徹底的口語詳説  
 新興日本の道徳  
 的再建を目ざして  
 百萬部普及計畫！

幼學綱要是、明治天皇が教育勅語渙發に先立ち、國民道徳の模範を示す  
 思召しから侍講元田永孚に命じて撰進せしめ給ひ、全國小學校に恩賜せら  
 れた勅撰訓話集である。全七卷二十章中に、和漢に亘り美譚逸話二百二十  
 九を收め、教育勅語の大精神も又本書中に顯現されてゐる。たゞ原文が當  
 時の漢文直譯體で難解なる爲に、多くは奉安室に納められ道徳聖典として  
 活用されることが少なかつたのは正に聖代の遺憾事である。本書は此の國  
 民的大寶典の全國的普及を目的として原書全部を小學兒童にも讀み易い口  
 語文に謹譯し、これに詳細なる歴史的地理的註釋を加へたものである。從  
 來世に出た一二の類書は原書の拔萃であり、或は原文の佛を全く止めざる  
 再話集で、本書の内容とは比すべくもない。學童の讀物として、又教師や父  
 兄の話材集として此に超ゆるものなし。非常時日本に 明治天皇の御聖徳  
 を偲び、道徳國家確立のためにも、全日本が舉げて就くべきは此書である。

【教育特輯研究】

當代教育の現實を視る 千葉春雄氏編 價一・九〇 送一四	職業指導の實際研究 千葉春雄氏編 價二・三〇 送一四	現代修身教育指針 千葉春雄氏編 價二・三〇 送一四	公民教育の實際研究 岡本正一氏編 價一・八〇 送一四	農村教育の企畫と實際 前本一男氏編 價二・〇〇 送一四	國史教育の革新 前本一男氏編 價二・五〇 送一四
【兒童叢書】					
ファーブル蟲物語 (第一卷) 水谷まさる氏著 價一・五〇 送一四	ファーブル蟲物語 (第二卷) 今田謹吾氏著 價一・五〇 送一四	少年少女世界地理文庫 イギリス 西龜正夫氏著 價〇・六〇 送一二	少年少女世界地理文庫 アメリカ 西龜正夫氏著 價〇・六〇 送一二	少年少女世界地理文庫 フランス 西龜正夫氏著 價〇・六〇 送一二	少年少女世界地理文庫 印度 西龜正夫氏著 價〇・六〇 送一二
ファーブル蟲物語 (第三卷) 千葉省三氏著 價一・五〇 送一二	ファーブル蟲物語 (第四卷) 須崎邦武氏著 價一・五〇 送一二	ファーブル蟲物語 (第五卷) 鎌田賢吉氏著 價一・五〇 送一二	ファーブル蟲物語 (第六卷) 濱田廣介氏著 價一・五〇 送一二	少年少女世界地理文庫 ブラジル 西龜正夫氏著 價〇・六〇 送一二	少年少女世界地理文庫 ブラジル 西龜正夫氏著 價〇・六〇 送一二

少年少女世界地理文庫 トイッ	少年少女世界地理文庫 口シヤ	少年少女世界地理文庫 南洋	少年少女世界地理文庫 北歐	少年少女世界地理文庫 イタリヤ	少年少女世界地理文庫 濠洲	少年日本地理文庫 臺灣	少年日本地理文庫 朝鮮	少年日本地理文庫 奧羽	少年日本地理文庫 中部
編	編	編	編	編	編	地方	地方	地方	地方
西龜正夫氏著 價〇・六〇 送一二	西龜正夫氏著 價〇・六〇 送一二	西龜正夫氏著 價〇・六〇 送一二	西龜正夫氏著 價〇・六〇 送一二	西龜正夫氏著 價〇・六〇 送一二	西龜正夫氏著 價〇・六〇 送一二	橋本賢康氏著 價一・五〇 送一二	橋本賢康氏著 價一・五〇 送一二	橋本賢康氏著 價一・五〇 送一二	橋本賢康氏著 價一・五〇 送一二
少年日本地理文庫 九州	少年日本地理文庫 近畿	少年日本地理文庫 四國	少年日本地理文庫 中國	少年日本地理文庫 關東	少年日本地理文庫 北海道	少年日本地理文庫 樺太	少年日本地理文庫 南洋洲	少年日本地理文庫 關東洲	少年日本地理文庫 關東洲
地方	地方	地方	地方	地方	地方	地方	地方	地方	地方
橋本賢康氏著 價一・五〇 送一二	橋本賢康氏著 價一・五〇 送一二	橋本賢康氏著 價一・五〇 送一二	橋本賢康氏著 價一・五〇 送一二	橋本賢康氏著 價一・五〇 送一二	橋本賢康氏著 價一・五〇 送一二	橋本賢康氏著 價一・五〇 送一二	橋本賢康氏著 價一・五〇 送一二	橋本賢康氏著 價一・五〇 送一二	橋本賢康氏著 價一・五〇 送一二
お話全集尋常二年生	お話全集尋常一年生	お話全集尋常一年生	お話全集尋常一年生	お話全集尋常一年生	お話全集尋常一年生	お話全集尋常一年生	お話全集尋常一年生	お話全集尋常一年生	お話全集尋常一年生
長尾豊氏著 價一・〇〇 送一二	長尾豊氏著 價一・〇〇 送一二	長尾豊氏著 價一・〇〇 送一二	長尾豊氏著 價一・〇〇 送一二	長尾豊氏著 價一・〇〇 送一二	長尾豊氏著 價一・〇〇 送一二	長尾豊氏著 價一・〇〇 送一二	長尾豊氏著 價一・〇〇 送一二	長尾豊氏著 價一・〇〇 送一二	長尾豊氏著 價一・〇〇 送一二

お話全集尋常三年生	お話全集尋常四年生	お話全集尋常五年生	お話全集尋常六年生	趣味の地理・學習旅行文庫 山め	趣味の地理・學習旅行文庫 川め	趣味の地理・學習旅行文庫 湖沼め	趣味の地理・學習旅行文庫 島め	趣味の地理・學習旅行文庫 汽車	趣味の地理・學習旅行文庫 船
長尾豊氏著 價一・〇〇 送一二	長尾豊氏著 價一・〇〇 送一二	長尾豊氏著 價一・〇〇 送一二	長尾豊氏著 價一・〇〇 送一二	西龜正夫氏著 價〇・七〇 送一二	西龜正夫氏著 價〇・七〇 送一二	西龜正夫氏著 價〇・七〇 送一二	西龜正夫氏著 價〇・七〇 送一二	西龜正夫氏著 價〇・七〇 送一二	西龜正夫氏著 價〇・七〇 送一二
趣味の地理・學習旅行文庫 空	趣味の地理・學習旅行文庫 夏	趣味の地理・學習旅行文庫 冬	趣味の地理・學習旅行文庫 地圖	小學詩の讀本 (尋一用・全二册)	小學詩の讀本 (尋二用・全二册)	小學詩の讀本 (尋三用・全二册)	小學詩の讀本 (尋四用・全二册)	小學詩の讀本 (尋五用・全二册)	小學詩の讀本 (尋六用・全二册)
西龜正夫氏著 價〇・七〇 送一二	西龜正夫氏著 價〇・七〇 送一二	西龜正夫氏著 價〇・七〇 送一二	西龜正夫氏著 價一・三〇 送一二	千葉春雄氏著 價一・三〇 送一二	千葉春雄氏著 價一・五〇 送一二	千葉春雄氏著 價一・五〇 送一二	千葉春雄氏著 價一・五〇 送一二	千葉春雄氏著 價一・七〇 送一二	千葉春雄氏著 價一・七〇 送一二

【教育・科學兒童讀物】

力人の黒偉人物語 佐々木秀一氏著 價一・五〇 送一四	小學國史 川畑篤郎氏著 價一・四〇 送一四	日本女性名花集 渡邊軍活氏著 價一・八〇 送一四	科學玩具二百種 渡邊軍活氏著 價一・八〇 送一四	世界大發明家出世美談 渡邊軍活氏著 價一・八〇 送一四	科學鳥獸蟲魚の生態 加宮貴一氏著 價一・八〇 送一四	少年昆蟲採集法 厚生閣編輯部編 價一・〇〇 送〇八	科學實驗と 科學玩具の作り方 工藤善助氏著 價一・五〇 送二二	電氣實驗と 電氣玩具の作り方 工藤善助氏著 價一・五〇 送二二	子供の ための 昆蟲學 加藤正世氏著 價二・三〇 送二四
少年航空讀本 野田航空少佐校閱 山田新吾氏著 價二・〇〇 送一四	少年航空兵とは？ 山田新吾氏著 價一・二〇 送一四	少年濱口雄幸 田中貢太郎氏著 價一・八〇 送一四	戰場血涙で綴る 土田忠助氏著 價一・二〇 送一四	佛陀の説いた面白い話 小瀧淳氏著 價二・〇〇 送一四	續佛陀の説いた面白い話 小瀧淳氏著 價一・八〇 送一四	印度頓智百譚 ボリス・スズキ 澁澤青花兩氏著 價一・九〇 送一四	祝祭日お話集 長尾豊氏著 價二・〇〇 送一四	臨海林間 夏季學校お話集 長尾豊氏著 價一・八〇 送一四	幼稚園ばなし 長尾豊氏著 價一・八〇 送二二





児乙部36-N-6



\*1200600484376\*